

皇室の弥栄を祈って



日本遺族会会長
参議院議員

水落敏栄

五月一日、天皇陛下が即位され、令和の時代が始まりました。心よりお慶び申し上げますと共に、皇室の弥栄を御祈念申し上げます。

「平成は、戦争のない時代となり、心から安堵しております」上皇陛下の昨年の誕生日の記者会見でのお言葉です。平成が戦争のない時代となったのは、多くの人々のたゆまぬ努力の賜物であり、何より上皇陛下のお姿をもって、国民に戦争の悲惨さと平和の尊さをお示しくくださったことが大かつたと存じます。

歴史は日々の積み重ねであります。上皇陛下は、皇太子時代より広島、長崎、沖縄などの訪問を続けられ、即位後長らく心にあった海外の戦域を巡る慰霊の旅を始められました。上皇陛下の御心は、戦後、国民を励まそうと昭和天皇が始められた全国巡幸のお姿や、国家のために尊い生命を捧げられた人々の御霊を慰め、その実績を永く後世に伝え、ひたすら国安からんことを願って東京招魂社（現靖国神社）を創建された明治天皇など、歴代の天皇陛下のなさりを学ばれた上で育まれたものであると拝察いたします。

故に、今上陛下もまた、上皇陛下はじめ、過去の天皇の御心を受け継ぎ、国民の幸せと、世界の平和を願うことを即位後朝見の儀で宣べられました。私は、前日の退位の礼、即位の礼に共にお招きにあずかり、歴史的な瞬間に立ち会わせていただきましたが、その際には、常に戦没者とその遺族に対し、心を寄せ続けてくださった上皇上皇后両陛下に心より感謝申し上げますと共に、天皇陛下のお言葉を聞きながら、新しい御代も必ずや平和な社会とすべく、戦争の風化を防ぎ、平和の尊さを語り継ぐ遺族会活動を次世代に繋げる決意を新たにいたしました。

遺族会にとって、平成とは「変革の時代」でありました。昭和二十年有史以来初めての敗戦、占領を体験し、国土は焼け野原となり、飢え、貧困、何重もの苦しみを国民皆が受け、一億総飢餓と言われた時代、一家の大黒柱を失った遺族は困窮を極めました。そうした中、遺族は互いに助け合い、英霊の顕彰と恒久平和な社会の実現を目指し、日本遺族会は結成されました。

戦後、遺族への処遇がままならない中、手弁当で首相や閣僚に陳情を繰り返し、断食祈願も辞さない戦没者の妻・婦人部の背を見て育った遺児は、成長と共に組織に参画し、青年部を結成し、ご遺骨の収集等に取り組みました。活動の中で、遺児として何ができるかを摸索し続け、その思いは「戦没者の遺児による慰霊友好親善事業」、「昭和館の建設」として結実しました。

双方、国による遺児への慰藉の一環であり、慰霊友好親善事業は、父の亡くなった地を訪ね、心行くまで慰霊したい。そして、図らずも戦禍に巻き込まれた現地の方々へお詫びし、平和な社会を願い友好を深めたいという事業であり、昭和館は戦争の悲惨さを伝えるための館として建設されました。つまり、遺児が目指した新しい慰藉の形とは、個別保証ではなく「平和を語り継ぐこと」そのものであります。そして、その思いを次世代へ伝えることが遺児の最大の使命となりました。

平成二十九年三月、構想から五年の時を経て、戦没者の孫ひ孫でつくる新生「青年部」が結成され、現在三十九支部で活動しております。平和な時代に生を受けた青年部世代にとって、戦争とは遠い歴史であり、活動は容易ではありません。しかし、戦後七十年余、天皇陛下はもとより、多くの人々の不断の努力により平和な社会が築かれました。その一翼を遺族会が担ったことに誇りを持ち、令和が必ずや平和な社会となるよう、青年部と共に活動してまいります。